



中国がわかるシリーズ18 中国統一への動き～孝文帝の挑戦～

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口治明

ユーラシア西方の frank 王国に比せられる [北] 魏では、華北統一を機に漢化政策を一層推進しようとするグループと遊牧民の伝統を維持しようとするグループが対立を続けていましたが、太武帝は、漢人宰相、崔浩と（道教の一派、五斗米道の流れを汲む）新天師道の開祖、寇謙之の教唆を受けて、漢化政策を貫徹・純化すべく、446 年、仏教を弾圧し、仏像を破壊しました（中国では、大規模な仏教弾圧が 4 回に亘って行われます。これを、時の皇帝の諡号から「三武一宗の法難」と呼びますが、その第一回がこれに当たります）。また、部族解散を断行し、部族連合国家から、中央集権国家へと大きく舵を切りました。

太武帝は、450 年には、南征を行い、宋の心胆を寒からしめました。宋の国勢はこれ以降、急速に衰退を始めます。江南では、銅の絶対的不足という壁に突き当たってはいましたが、貨幣経済が浸透し、下克上の気運が高まっていました。武人のみならず、皇帝に取り入って、地位の上昇を目指す恩倅と呼ばれた人々もいたのです。恩倅には、商人が多かったようです。寒人政権、宋は、ある意味では、下層の人々に希望を植え付けたのでした。貴族制は、その足下から徐々に崩れ始めていたのです。

452 年、4 代、文成帝（～465）が即位すると、仏教弾圧の反動が生じました。仏僧の長、曇曜は、復仏事業の一環として雲嵩石窟の開削事業を指導しました。世界遺産にも登録されているグプタ様式の端正な大仏は、[北] 魏歴代の皇帝を映したものです。皇帝は如来であり、官僚は菩薩、人民は衆生であるとする国家仏教の理念を、曇曜は、現実の絵姿としてまさに現出させたのです。曇曜の尽力で、仏教は華北全域に広まります。国家仏教は、易姓革命等の中華思想に対抗して異民族の中国支配を正当化する新しい思想として、特に北朝の王朝に庇護、管理されることになるのです。雲嵩の巨大な石仏は、龍門を経てやがて海を渡り、東大寺の大仏として再現することになるでしょう。5 世紀に入って、中国は、[東] 漢時代の儒教 1 尊から、3 教（儒教、仏教、道教）並立の時代に至ったように思われます。なお、5 世紀の中頃には、ペルシアからゾロアスター教（胡



長期投資仲間通信「インベストライフ」

天神、後にけん教)も伝えられました。

5代、献文帝(465～471)は、養母、文明(馮)太后との権力闘争に破れ、471年、5歳の孝文帝が即位しました。[北]魏では外戚の弊害を避けるため、皇帝の生母を自殺させる慣習がありました(この慣習は孝文帝が廃止させました)。馮太后は、摂政として垂簾聽政を行いましたが、極めて有能な政治家であり、武則天の先達のような女性であったと思われます。東方の遊牧民の間では、女性の地位が高かったことが伺えます。485年、馮太后は、李沖の建言に従い、三長制(5家を1隣、5隣を1里、5里を1党として、人民を国家の下に再組織する制度。これによって、鮮卑伝統の部族制は最終的に解体されることになります)とそれに基づく均田制(人民に土地を貸し、その代価として租、調という形で収税を行う制度)を実施し、中央集権化をさらに推し進めたので、[北]魏の国力は大いに伸張しました。馮太后と孝文帝の関係が密なことから、一部では、孝文帝実子説が唱えられています。490年、馮太后が死去し、名君、孝文帝の親政が始まりました。苻堅と同様、理想家肌の孝文帝は、周礼を尊重し、漢化政策の徹底に努めました。

493年には、平城(大同)から、中原の洛陽に遷都を強行し、鮮卑の姓を中国風に改め、鮮卑語を禁止し、胡服や伝統習俗まで、切り捨ててしまったのです。ユーラシアの西方、メロヴィング朝法兰ク王国でクローヴィス(ルイ)1世が、ローマ教会に宗旨替えしたのが496年ですから、東西の暗合には、不思議なものがあります。この政策は、伝統派の激しい反発を招きましたが、孝文帝の信念は、微動だにしませんでした。孝文帝は、明らかに中華皇帝としての自負心を持っていたのです。五行説を援用して、[北]魏は晋を継ぐ水徳の王朝だと宣言したことは、五胡十六国各朝の正統性を否定するものであり、拓跋部は、五胡ではない、と広言したものに他ならなかったのです。孝文帝が永らえていれば、中国の統一は実現したかも知れません。しかし、499年、孝文帝は、南征途上、わずか33歳で夭折しました。なお、この時代、優れた楷書を残した書の巨人、鄭道昭が出ました。

なお、5世紀は、倭で、巨大な前方後円墳が作られた時代もありました。5世紀中頃、大阪平野に作られた世界最大級の陵墓、大山古墳(伝仁徳天皇陵)等の百舌鳥古墳群の威容は、海上からも良く見え、韓半島などからの外国使節の目を驚かせたことでしょう(そのために、おそらくかの地が選ばれたのです)。なお、大山古墳は、始皇帝陵の3分の1～5分の1の体積を有していますが、これは驚くべき大きさと言えましょう)。倭も着実に国力を蓄えつつあったのです(倭には、大和と九州の2大勢力がありましたが、この頃、大和勢力は、河内政権の下に統合されていたと考えられています)。韓半島で争う三国、特に百濟は、辺境の強兵国、倭の軍事力を活用して高句麗や新羅に対抗しようと考えていた節があります。その見返りとして、百濟は大陸の進んだ文物(7支刀や仏教など)を倭にプレゼントし続けたのです。